

「がん治療の生活・

ながらワーカーについて」

1. はじめに

20年前、私は姫路赤十字病院で研修医として勤務していました。入院診療での私の担当は、最重症患者・原因不明熱・膠原病・難病・血液疾患でした。白血病などの悪性疾患を患う同世代の患者さんの治療も多く担当し、病院の内外でさまざまな交流をしたことが思い出されます。全員が前向きに、努めて明るく、抗ガン剤の副作用には忍耐強く、病状の進行時にも最後まであきらめずに治療を受けられていたのが印象的でした。

そして10年前、担当していた一人の男性と東京でお会いする機会を得ました。白血病を克服された男性は、姫路赤十字病院時代の思い出を楽しそうに話をされたのですが、その時に「白血病の治療で最も困ったことは何かわかりますか？」と質問されました。「副作用」と答えた私に対して「経済的な問題です」と教えられたのです。白血病の抗ガン剤治療は1ヶ月ごとに入院を繰り返すため、仕事を継続することができなくなってしまったわけです。



そして、悪性疾患の治療をしながら就労が出来るような仕組みづくりの必要性を、患者代表として厚生労働省に提言していると、力強く語られていたのが印象的でした。就労者が大きな病気にかかっても十分な相談先が無かった時代の話です。

2. 日本の現状

日本では、人生のうちに2人に1人がガンにかかり、そのうち3人に1人は就労年齢（16歳から64歳）であり、その数は約25万人と推計されています。

また、治療の進歩により、ガンと診断されても完治や長期生存が期待できる時代になっており、治療も長期に渡ることが多くなっています。つまり、ガンを抱えながら働く患者さんが増えてきているわけです。

そのため、働きながら治療を受けることができるシステムの構築が求められるようになり、7年前には国が勧める「がん対策推進基本計画」の重点課題として「働く世代のがん対策の充実」が盛り込まれました。ガンと診断された時に仕事をしていただ方の約3割が退職もしくは解雇となり、約5割の方の個人所得が減少していることを国が大きな社会的な問題として認め、改善に乗り出すことになったわけです。

3. ながらワーカーとは

2年前の2017年、日本対がん協会は「がんになっても普通に働ける社会の実現を目指す」ための広告キャンペーンとして「ながらワーカー」という言葉を作成しました。

相談しながら、話し合いながら、通院しながら、育児や家事をしながら働くガン患者の姿を前向きに伝えることを目的としています。ガンを経験した方のアンケートで、「ながら」という言葉を後ろ向きではなく前向きな意味としてとらえる方が多かったため、この言葉に決定されたようです。厚生労働省からも「事業所における治療と仕事の両立支援のためのガイドライン」が作成されるなど、「ながらワーカー」の方々を支援する社会作りが進められています。ガン診療を担う病院には高額療養費制度や傷病手当金や介護保険制度など、社会的な支援策の利用についての相談を行う専門の職員も在籍する時代となってきました。まだまだ十分な内容とは言い切れませんが、日本社会は改革に向けて一步一步進んでいると言えるのではないのでしょうか。

4. 最後に

ガンの治療は手術、抗ガン剤、放射線治療だけではなく、緩和治療やメンタルヘルスのケアも大切です。同じ治療をしても合併症や副作用の出方はまったく違います。患者さんの社会的な背景や経済的な問題点も大きく異なります。ガンの治療は、患者さん一人ひとりに最適な個別の治療選択が、すなわち全人的な医療が求められる時代です。私は、一医師として、一社会人として、さまざまなガン患者さんの治療や支援を継続していきます。

津山を、そして日本を、安心して至福の医療を受けることができる社会にしたいものです。

中島病院 院長 中島 弘文



お問い合わせ先：津山市健康増進課 TEL 0868-32-2069